大洲高校PTA月報

令和６年１２月号

会員寄稿

できることから

保健・教育相談課　森永　友子

私は子どもの頃から完全に甘え気質で、すぐに「わからない、できない」と言うことが多かった。だが、いつも誰かに助けられて、何とか乗り切ってきた。あまりにも、助けられることばかりで情けなくて、よく落ち込んだが、「困った時には、誰かが味方になってくれる」という自信と安心感を持っていた。そのような私でも『更級日記』の作者のように、そのうち、もっとましな人間に変わり、大人になれるのではないかと思っていた。希望校ではないものの希望した学部に学び、中学校時代からの夢であった教員になり、年齢を重ねていくうちに大人になったと感じることもできるようになっていた。

しかし、曽野綾子さんの著書『なぜ子どものままの大人が増えたのか』を読んでいると、「したいことだけするのは幼児性の表れ、若者たちにはいささかの苦労をさせて、庇護される自分のことだけをするのではなく、他人を庇護し愛を与える立場に立たせることだ。それが活力と存在感のある大人になる唯一の方法なのである」とあり、愕然とした。進学先が希望校でなかったのは、高校時代に苦手科目を勉強しなかったために、共通一次（今の共通テスト）で点が取れなかったからである。それを反省して、大学では頑張ったと思うが、興味のある分野の勉強をしていただけだと言えなくもない。教員になってからも、「わからない、できない」ことは、相変わらず誰かに助けてもらっている。私はいまだに「幼児」そのものではないか。

事あるごとに頼っていた母が亡くなり、もうすぐ１年が経とうとしている。昨年末、年賀状を出していた先に喪中はがきを送ったところ、広島や山口にいる大学時代の友人や大学の卒論担当の恩師から手紙をもらった。特に恩師からの手紙は、届いたのが静岡の母の納骨を済ませて家に帰った時であり、母が亡くなってから張りつめていたものが一気にしぼんでしまったような虚脱感にとりつかれていた時で、大変驚いた。手紙には卒論での口頭試問でのことが書かれていた。卒論での私の頑張りを褒めてくださっており、こそばゆく感じた。

実際に会うことは、ほとんどなくなっても、大学時代の友人も私を慰め、励ましてくれた。私は恩師や友人の気遣いや優しさをありがたく思った。自分は、一人ではなく、周りから支えられて生きていると、改めて感じた。そして、周りに人がいることを忘れないでいれば、自分がその人に何かできることも見つけられるはずだ、と思った。自分のことだけにとらわれてしまう未熟さを恥じるよりも、「どうせ私にはできんし」などと口に出してしまって、ますます落ち込むよりも、「庇護」には当たらないと言われそうな小さなことでもいいから、周りの人を気遣い、優しい気持ちをもって、できることからやっていきたい。